

ああ、 結婚！

—婚活日記—

第30回

黒田長宏

<2024年2月1日>

2度めのカテーテル処置まであと6回勤務することになっているが、昨日は定時まで勤務できたのだが、昨日も夕方15分くらいあったのだが、今日は午前中に1時間くらい、背中の中左側が痛くなってしまい、恥ずかしいような屈辱のような変な気持ちながらも、背に腹は代えられないと、仕事を引き継いでもらって早退した。職場も病院ではあるが、心臓のカテーテル措置はしていない。車で15分ほど離れた、手術した心筋梗塞緊急対応の病院で検査。原因不明。気持ちは、このまま緊急手

術のほう もう一つ残っていて、2月13日にカテーテルで広げる血管を、このまま処置してもらったほうが楽かなと思っていたが、CT、心電図、血液に異常が見当たらなかった。仕方がない。同僚に頼まざるを得なかった。こうした時の感情。劣等感のような。これは何なのかを広く考えなければいけないのだろうと思っていた。しかし、まったく結婚難問題とどうつながる話なのか。これは。外来の特別時間外出費は痛かったが、安心を得た。

<3月21日>

前回書いたのはあの日だったかと思うほど月日は経過し、ステントが2つに増えてから、職場は少し作業量を減らしてもらい、病院も手術のところから、かかりつけの医院に変更された。年をとり、そして心臓の病気となり、結婚難の立場はさらに悪化した。ここからでさえ、どう立ち向かっていこうか。どうすればいいのだろう。

職場の作業も数日前から病気になる前と同じ内容まで戻された。背中の原因不明の痛みも出なくなったが。しかし、テーマである、結婚難問題に関して、社会的にも、本当の目的のはずの、自分自身の状況も、いつまでたってもなんの変化も生み出せないままだ。56歳という年齢と、急性心筋梗塞という病気と。さらに難しく、遠のくばかりの問題に思える。この現実をどうすればいいのか。この調子では、こうした同じ文章を繰り返すことしか出来ないのではないか。この停滞こそ多くの人も陥っているのではないか。どうにもできず同じような日々。ここに発表する事との矛盾があるのだと思う。発表する事、提出して公表される事は、同じ事や停滞ではなかなか発表されな

いのだと思う。結婚難にしても停滞した永遠のような毎日が続いているのみで、逆に発表される物には起伏や変化が注目されるどころだからだ。そういう人は関心を持たれないだろう。ましてや結婚相手の候補者たちにも。

※以下、日付が前後して複雑になってしまったが、このところトピックスが私に生じて来なくて、もう58号に提出しようとしていたところ、突発的にトピックが生じ、急遽57号に間に合わせようとしたためである。修正していくと臨場感が減ったり、微細な面が加工されてしまうと思ったので、前後しているのである。

<5月2日>

勤務先で最近、病気前の業務に戻してもいいでしょうと言われ受けた。以前の痛みや、息切れや動悸なども無く出来ているようである。私自身の高齢化や大病で時間が更に過ぎてしまったが、結婚難問題は自身も含めて停滞、難航のまま。冴えない文章が続く。

出版物や提出して読んでもらう文章は9割以上、ほとんどが面白かったり、起伏があったり、ドラマ性を伴う日々の記述なのではないだろうか。だが、現実とは違う。小説家でも脚本家でも学者でもない、しかも結婚もしてもらえないような、能力のない人物にとって、その日記などは、本当は、今日も同じ、今日も同じ、今日も同じというだけの繰り返しなのだ。やりようがない。どう変化していいかわからない。変化がやってくることもない。そういう意味で世からでまわってくる文章などは相当脚色されたものか、変化を出せない、結婚もできないでしまう人物にとっては、別世界なのだ。この私の文章だって、提出物という意識から無

理に脚色され続ける。本当は、今日も結婚できない。今日も結婚できない。今日も結婚できない。という文章だけが、50回も100回も、コピー＆ペーストで後から付け足せばいいだけの事なのだ。むしろそのほうが真実なのである。

なんて、書いておきながら、だけど前段のほうが真実だとは思ふ。だけど、昨日は15年も同じ勤務先の異性なのに、私のYouTubeなどに匿名でいいし、馬鹿野郎とだけ書いてもいいかなんか書いてくれなどとしゃべって見たが、なんだか馬鹿みたいである。他でも言ってきたことだが、異性に器用さやエネルギーが出せない人には、昔の見合い結婚のほうがよほど有難く、家族を持って生きられるシステムだったと思う。ところが現在は、恋愛結婚したくせに離婚している悪い意味での『個人主義社会』になってしまっている。なんだかんだ言ってもエゴイズムに過ぎないから二人の間でさえ信用が続かない。裏では略奪で表向き離婚して再婚とか、そんな世の中で信頼なんか生まれるかい。

<5月3日>

結婚難問題があまりに日々変化を出せず、今回も58号分記載に期待しようと早めに57回の原稿を送ってしまったのだが、今朝、茨城新聞を眺めると、結婚成就とは違う話題だが、私としては、結婚そのものが難しくなった場合もテーマだが、明治生まれの曾祖母にも育てられたからか、代々受け継いできた遺伝子の存続というのに関心があり、それを私でストップすることも考えてしまうのだったが、このことも以前にここにも書いたことがあっただろうか。

今朝の新聞記事というのは、15日に開始するということか、プライベートケアクリニック東京という医療機関が非匿名限定での精子提供を募集開始するということである。担当者は、伊藤ひろみさんという女性で、この人は以前にも茨城新聞に出ていたのだと思うが、精子提供関係のスタッフをしているというのを見たことがあるのを思い出した。その時はスルーしてしまったのだが、今回は、匿名だと私的な精子売買が行われていたり、倫理的にもプライバシーからの事件的な背景などから躊躇していた面を、非匿名限定にすることにより、そうした問題に改善をはかるということらしく、私自身もかなりの年の差婚は相手もいることであり、かなり難しく停滞してしまうため、先祖代々の遺伝子のことならば、精子提供というのは私の心残りを終わらせるのではないかも思い、それに、遺伝子存続の問題を別にできれば、年齢の近い、子供が出産しづらくなった年齢の人とも結婚対象の可能性が、私のように考えてしまう思考の持ち主でも幅が広げられるのかも知れない。

ただ、こうした少数の件は、倫理的、法的にも賛否出ることでもあり、それでもこれなら実行できるのではと読んだところ、まだ私の場合にはネックが残っていた。それは今回の募集年齢が上限45歳というのだった。また私には急性心筋梗塞発症後という特殊性もある。

それで、プライベートケアクリニックに今朝、さっそくメールした。私信ではあるが、特に問題はないと思い、そのままコピー＆ペーストして、対人援助学会にもここで通知したいと思った。もちろん私のYouTube(婚難救助隊)にもこれから発言する。

(医療機関に送った内容)

私は結婚難で子供が出来ず、先祖から受け継いだ遺伝子のつながりを私がストップさせてしまうことが悩みで、精子バンク提供があるのは知っていましたが、社会がなかなか認知しないようだし、56歳という年齢もあり躊躇していましたが、精子の運動の検査もあるならば、もしこの年齢でも検査で問題がなければ、今回の条件でなくてもよいところがあれば匿名でも非匿名でも、ドナー提供しておきたく、もしかしたら私の先祖からのつながりができるかもしれないという期待から、そうしておきたいのですが。あまり高いと困りますが、精子提供に私のほうからお金を支払ってでもバンクしておきたい気がします。

そうすれば、高齢結婚を目指しても、子供が出来ない年齢になった同世代以上の女性とも結婚を、出産と関係なく選択できるかも知れないと思いました。

個人的な特殊性として、今年の1月に急性心筋梗塞を発症してしまいましたが、助かり、食事や運動で血液検査も良くなったようです。仕事も以前の作業量に戻りました。体調も悪くならないようです。

YouTubeで結婚難問題を憂慮して、『婚難救助隊』というパフォーマンスを続けて、現在登録者が515名いてくれます。

勇気がなく、男性としても子供が出来ない難しさに直面し、現実的に精子バンクに精子提供をすることが、高齢男性にとつ

でも遺伝子をつなぐ有力な方法だと思います。

私は献血を100回以上してきました。精子の提供も命の提供だと思います。なんとか考慮をお願いします。

(以上)

私は、結婚難問題があまりに進展できず、雑誌などに発表できる話題ではない、進展のない日々こそ真実があるのではないか。記述物だけでは真実が振り分けられるのではないかというようなことを最近ここで書いてみたが、矛盾するようだが、この、精子提供というあまり話題にされない方法論は、倫理面も含め、結婚難高齢男性の生きがいについて、なんらかの示唆になるのかも知れないと思い、社会への反抗的な意味もなく、真面目に考える。

<5月5日>

再々送し、加筆させていただく。茨城新聞には私と同じ56歳で無職だという人が投稿していて、朝の5時頃から起きて歩いたり走ったりして気持ちを強くして歩んでいこうという内容だった。抽象的、思索的な内容で、社会的に不器用な人なのかなと思ったが、一寸先は闇だが、私のほうは15年以上勤務させてもらっているところを継続していて、無職だったらプレッシャーが
あったかも知れないと思ったりしたが、若い時には職場を変えるという勇ましさも戸惑うこともなく出来たのに、老いというのは魂を沈ませる。松本清張の歴史短編では私より3つ年上を、時代が違うとは言え、老人と記されてい

た。

今日はこどもの日。私は57号で加筆しようとしたわけは、昨日医療機関にメールした、精子バンクの事をもっと調べてみるべきではないかと思っているからである。卵子バンクもそうである。

その考えについては、SNSなどにアップした文章をそのまま掲載するが、このまま埋もれて死ぬだけかと思うと、死んだかも知れないのに助けられた命でもあるものの、ベーシック・インカムや脱原発など、私が思うことは為されないのが嫌な予感もするが、米紛は社会的に浸透されようとしているようにも感じるが、精子凍結、卵子凍結は、失った希望を取り返す科学技術なのかも知れないと思ってきた。社会に意識付けならば、微々たる力を加えることが出来るのではないだろうか。対人援助にもなるはずだ。精子凍結、卵子凍結から心が助かる人もあろうと想像するのだ。58号には、
そういう面での動きが果たして書けるだろうか。書くのは私自身だろうがよ。

(SNSにアップした文章)

倫理面は思案中だが、結婚してもらえず先祖から子孫存続という希望を絶たれる男女にとって、見放されても希望を取り戻す方法は、科学技術の時代ならば卵子凍結と精子凍結だと思ってきた。それは既にある。高齢卵子と高齢精子が保存されれば科学の発達で可能性が高まるのを社会にふっかけようかと思う。

<2024年5月9日>

58号で提出しようと思っていたのだが、精子提供の逆説のような案が閃いて、行動もしたので、私のような急性心筋梗塞で命拾いした者は、3ヶ月の間に何があるかわからない、待ってられないと思い、今回は再提出が多くなって申し訳ないのだが、やる気がないよりは悪くないと思い、(やる気がない時期も悪くはないのかも知れないが)

これ以下の部分を付記させていただく。

<2024年5月2日>

思わぬ急性心筋梗塞発症事件から3か月が経過し、出直しせねばならない。そのため、早めに57回の原稿を提出し、58回分の出来事に向けて再稼働である。(原発のせいで嫌なイメージの単語になってしまったが。)

<5月3日>

58回めも記述の日が空くのかなと半ば忘れていたところ、茨城新聞に東京の医療機関が非匿名の精子提供を募集するとあり、私自身の先祖代々の遺伝子のバトンを私でストップする罰の悪い気持ちを、まだ工夫できるかも知れないと思い、ただ45歳までの募集なので、年齢制限について医療機関にメールした。思えば結婚難だって、年齢制限で困難な面がある。適齢期はあるのも事実だが、限界にはまだなっていない場合も限界とされてしまう場合があるかも知れない。でも適齢期が一番適齢なのは当然だとも思うが。

<5月8日>

新聞を隔々見ていたのは良かったかも知れない。今回の東京の医療機関の担当の女性は自らがご主人の了解を得て、精子提供を受けて子供を持たれた経験者だと記事に書いてあったが、丁寧な返信を2度くれた。年齢制限のルールがあるので、すぐに決着は付かなかったが、もし将来的に高齢者でも精子提供が出来るようになったら連絡をくれるとのことで、私のほうも、積年思ってきた結婚難周辺の事々を殴り書きして訴えた。久しぶりにアクションを仕掛けたような気もする。望みを捨てなければ、可能性はまだやってくると信じてみたい。

<5月9日>

起床して着想が閃き、しつこいようだが、非匿名の精子提供を15日から開始するという医療機関の担当者にメールを重ねた。その着想は、精子提供するような男性は、社会的に優秀とされていたり、当然若さがあつたり、妻帯者であつたり、将来妻帯できる男性ではないか。すると配偶者からの子供と、精子提供した子供との異母兄弟姉妹間の結婚が生じるのではないか。異母兄弟の結婚は遺伝子が近い配偶者だと遺伝病の生じる可能性から結婚は禁じられているが、精子提供からそうしたことを減らすためには、結婚出来ず孤独死するような結婚難男性の精子提供ならばどうなのかという逆説のような事を提供したのだ。私自身の結婚難高齢化により、以前よりやる気は色々な面で減少してしまっているが、久しぶりに活動しているような気がした。他の面からも、高齢結婚難男性が救われる方法論、広げられれば女性も救われる方法論をもっと意識してインプットアウトプットしなければいけないはずだったのだが、きっかけがないと行為できない。今回は新聞を隔々眺

めていたことからの着想と実践だと思う。茨城新聞にもこの事を伝える営業をしてみようかなと思う。

これを書いた後、早速茨城新聞にメールした。内容を添える。

（茨城新聞に送った内容）

5月2日か3日頃だと思いますが、プライベートクリニック東京という医療機関の精子提供の記事を読み、私自身が結婚難で子供がいなくて、罪悪感のようなものを持っていたので、精子提供によって罪悪感が解消すると思い、担当者の伊藤さんにメールしたところ、丁寧な返事をいただき、私は56歳ですが、45歳の年齢制限があるということで残念でした。しかし、将来年齢制限が緩和、撤廃など生じれば連絡をくださるとのことでした。

さらに、伊藤さんに、生涯未婚だった男性のほうが、精子提供による異母兄弟間の出産の遺伝病の面について、生涯未婚だった男性のほうが、若さや社会的に優秀とされる遺伝子よりも有利な面ではないかという、聞いたことのない説を提出しました。民法で兄弟姉妹間の結婚を禁じているのに、精子提供だとそれがスルーされる可能性が考えられます。

独自すぎて理解されないかも知れませんが、マスメディアに通知しておくことで、ユニークかつ有効な動きを茨城県から将来の日本を動かしていこうと思い、メール差上げた次第です。

あの記事の提供をありがとうございました。